

男性保護司の保護観察体験記

雑感

保護司を拝命して10年余。保護司の職務内容すら知らないままの“いい加減”な心構えからのスタートであった。

初めて保護観察対象者を担当した時、それなりの意気込みもあって、行政機関、医療機関を対象者と一緒に訪ね回った。対象者の為に動くという正義感に似た昂揚感の為せる業であったが、これは対象者を通じた自己満足の領域でもあった。対象者に感情移入しすぎる危険性を孕んでいたのである。

幸か不幸か、このことに気付かせてくれたのは、対象者の再犯であった。保護観察の難しさを教えてもらった。

保護観察は「対象者の改善更生を助ける」ものであって誘導するものではないと思う。対象者が考え、行動し、その結果を自覚し、自ら再犯への道を閉ざすことを願う営みであろう。このことは保護司が無給であることとも関わってくる。無給とは一見不合理のような気がしていたが、逆に有給だと報酬に対応する成果が求められ、それは対象者を正しい方向に導こうとする無意識の使命感となって、過度の思い入れや固執といった余分なものをもたらしやすい。

対象者との適度な距離感を保ってこそ、対象者と客観的に向かい合うことができるのである。

こう思えるようになったのは研修と保護司会のおかげと言えよう。とりわけ、異年齢、異業種のメンバーの存在は、同じ思いを共有しているという認識がもたらす安堵と自負をもたらしてくれた最良の支えであった。

他者の人生とこれほど身近に接する出会いは保護司以外にはあるまい。だからこそ、唯一無二の出会いに感謝と緊張を持ってこれからも保護司として真摯に対峙していく覚悟である。